

代表理事だより

2020年12月号

「歓喜の歌」

今年はそれほどでもないのですが、12月になるとどこからともなく、クリスマスソングが流れてきて、にわかには気ぜわしくなります。併せて、ベートーベンの“交響曲第9番合唱付き”もテレビやラジオで聞かれるようになります。カラヤンが振ろうと小澤征爾が振ろうとその違いはよく分からないのですが、ビング・クロスビー、マライヤ・キャリーや山下達郎のどのクリスマスソングより、1年の終わりを締めくくるのには適しているように思えます。欧米では特別な機会に『第九』を演奏することはあるものの、年末だからとあらゆるオーケストラが演奏するものではなく、年末の風物詩となっているのは、わが国だけの現象のようです。ただ、それもなぜだか私にはわかりません。今までは、「みんなが聞いているから何となく」というのが正直なところでした。

最近知ったのですが、第4楽章の「歓喜に寄せて（歓喜の歌）」（*An die Freude* 1785年初稿、1803年一部改稿）の歌詞は、ドイツの有名な詩人（思想家とも言われる）シラーの詩作品「自由賛歌」（*Ode An die Freiheit* 1785年）を一部書き直して作成したものだということをNHKのテレビ番組であるピアニストが解説していました。興味深かったので、ネットでシラーの原詩を調べてみましたが、「Alle Menschen werden Brüder（すべての人々が兄弟となる）」という一節があり、解説によると実はこれが第九の最も大事なところだということでした。18世紀前後のヨーロッパですから、当時は危険思想と思われていた、“上も下もないみんな自由で平等、みんな結束しよう”という思いが込められているとのこと。そういう意味では、逆に、今のこの時期の年末に聞いて越し方を振り返るのには最適な音楽ではないかという気がします。

これを書いているうち、英国人の友人が昔、BBCオーケストラ演奏のベートーベンの交響曲の1番から9番までの交響曲全部をCDに入れてくれたのをふと思い出して、文字通り久しぶりに聞いてみました。どれも抵抗なくすっきり聞けましたが、これを機会に、九番だけはカラヤン、小澤征爾やフルトベングラーなどの演奏と比べてみるのも一興ではないかと思いつきました。芸術にはそのような楽しみ方があります。読書においても同じで、例えば、ハードボイルドの騎手であるレイモンド・チャンドラーの名著“*The Long Goodbye*”は、かつて、清水俊二の名訳（長いお別れ、1976）があったのですが、村上春樹が訳したもの（*ロンググッバイ*、2007）が現われるに及んで原作の面白さが一段と際立つことになりました。読み比べ見るとそれはよくわかります。比べてみる、これも翻訳物の楽しみ方の一つであることを発見できます。

これらはほんの一例で、“ことほど左様に”人生には楽しいことが多すぎて、どれもこれも堪能するには人生100年では短すぎる、というのが昨今の私の強い思いです。

“彼も逝き あいつも逝きて 残りしか
われはわれにて わが道を行く”
(令和2年(2020)12月12日)